

関西大学大学院 学生員○西澤 博志 関西大学工学部 飯島 俊之
関西大学大学院 学生員 田中 賢治 関西大学工学部 正会員 井上 雅夫

1. はじめに

従来、我が国の海岸では自然環境の保全が問題になり、時には、海洋汚染や海生生物の減少という事態を招き、必ずしも、海岸の本来もつべき役割を果たしていないのが現状である。このようなことから、近年の海岸整備事業においては、海岸における生物相を豊かにすることも望まれている。人工磯は親水機能やレクリエーション機能、多様な海生生物の生息地としての機能を兼ね備えた施設である。そこで本研究では、人工磯の造成に際し、一般市民がどのような評価をしているのかを客観的に評価し、その評価がどのようなものによって変化するのかを明らかにしようとした。

2. 調査方法

本研究では、前述したように、一般市民が人工磯に対して、どの程度の価値を見出しているかを客観的な指標（金額）で示し、それがどのようなものによって変化するのかを明らかにするために、一般市民を対象としたアンケート調査を行った。すなわち、2003年9月9日（火）に大阪府岬町にある淡輪・箱作海岸（人工磯）で岬町立淡輪小学校の4年生を対象に自然型体験学習（磯浜見学会）を行ったが、それに参加した小学生の保護者を対象として、続いて、2003年10月中旬から11月末にかけては、幅広い年齢層や居住地の市民を対象にしたアンケートをそれぞれ実施した。

3. 調査結果および考察

表－1 アンケート対象者の性別および年齢層

表－1 には、アンケート対象者の性別および年齢層を示した。これらによると、対象者はバランスよく分布していることがわかる。表－2 には、アンケート対象者を居住地別に示した。すなわち、このアンケートでは、性別、年齢および沿岸部と内陸部の居住者の意識を比較するために、このように分類した。

単位(人)				
	男性	女性	無回答	合計
保護者	10	55	8	73
一般住民	98	55	13	166
全体	108	110	21	239

単位(人)							
	10代	20代	30代	40代	50代	無回答	合計
保護者	0	0	45	23	3	2	73
一般住民	17	57	19	20	48	5	166
全体	17	57	64	43	51	7	239

図－1 には、「人工磯を造成するためには、あなたは一人当たりの税金として、いくら支払ってもよいですか」という質問、すなわち、人工磯の造成費に対する支払い意思額の平均値と中央値を示した。これによると、性別による差異はみられないが、20代から40代までは年齢が上がるにつれて、多くの金額を支払ってもよいという傾向がみられる。これは、年齢がいくほど高収入の人が多くなるためと思われる。なお、10代の支払い意思額が高い。これは、10代では税金を払っていない人が多く、他の年代と税金に対する考え方が違うためと思われる。居住地別には、沿岸部のものが、内陸部のものよりも海岸と触れ合う機会が多いため、高い値を示している。

表－2 アンケート対象者の居住地別の人数

			単位(人)
沿岸部	大阪府	大阪市、堺市、高石市、岸和田市、泉佐野市、泉南市、阪南市、岬町	118
	兵庫県	加古川市、神戸市、芦屋市、西宮市、尼崎市	15
	その他	和歌山市	1
内陸部	大阪府	豊中市、吹田市、茨木市、摂津市、高槻市、枚方市、寝屋川市、守口市、門真市、大東市	85
		東大阪市、八尾市、松原市、美原町、藤井寺市、富田林市、河内長野市、千早赤阪村	
	兵庫県	伊丹市、宝塚市、三田市、篠山市、豊岡市	6
	その他	大津市、京都市、向日市、八幡市、奈良市、生駒市、北葛城郡、五條市	13

図－2 には、「人工磯を利用するとしたら、人工磯の維持・管理のための利用料としていくら支払ってもよいですか」という質問、すなわち、人工磯の利用料の平均値と中央値を示した。これによると、年齢については、図－1 とほぼ同様な傾向がみられる。すなわち、図－2 についても10代が高い値を示している。これ

は、図示はしていないが、10代は他の年代に比べ海岸の利用頻度が少ないことから、若者が磯に馴染みがなく、海洋生物と触れ合う機会を強く求めているためといえる。居住地別にみると、内陸部のもののほうが、若干ではあるが、多額の金銭を支払ってでも利用したいと思っていることがわかる。これは、海岸を日頃利用していない人が豊かな自然環境や海生生物に触れてみたいという気持ちが、こうした結果をもたらしたもののと思われる。

図-3には、「人工磯に興味をもち、利用したいとしますか」という質問に対する回答を示した。これによると、「強く思う」と回答したものの支払い意思額が高くなっていることがわかる。また、図-4には、「人工磯に興味をもち、利用したいとしますか」という質問に対する回答を示した。この場合も、「強く思う」と回答したものの利用料が高い値を示している。すなわち、人工磯に対する関心の度合によって利用評価が大幅に変化することがわかる。

また、図-5には、人工磯と海水浴場の利用料の比較を示した。これは、著者らのアンケートで調査を行った人工磯の利用料と従来の研究による大阪府貝塚市の二色の浜海水浴場および大阪府岬町の淡輪海水浴場の利用料を比較したものである。これによると、二色の浜海水浴場の利用料が最も高いことがわかる。二色の浜海水浴場は交通アクセスが整備されており、淡輪海水浴場は交通アクセスが劣るためにこのような結果になっているが、いずれにしても人工磯に対する利用料は、両海水浴場に対するものよりも100~200円程度低いことがわかる。これは人工磯の認知度が海水浴場よりも低いためである。

すなわち、このアンケートでは、図示はしていないが、人工磯の認知度は全体で4割にも達していない。また、「人工磯をどのように知りましたか」という質問に対して、「実際に行った」とおよび「メディアで知った」という回答が全体で8割以上もあった。このようなことから、自然型体験学習のような活動や新聞やテレビなどのマスメディアによる広報活動が利用評価を高める方法の一つであろう。

最後に、本研究を行うに当たり、現地調査に協力してくれた関西大学海岸工学研究室の学生諸君、アンケートに快く回答してもらった方々に深謝する。

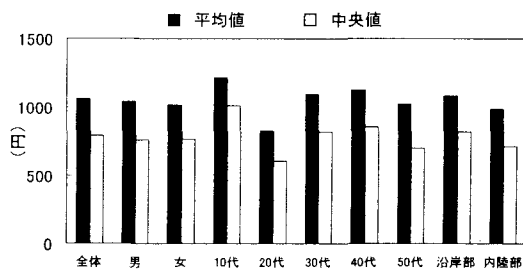


図-1 人工磯の造成費に対する支払い意思額の比較

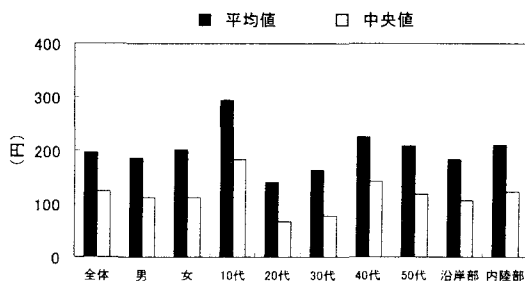


図-2 人工磯における利用料の比較

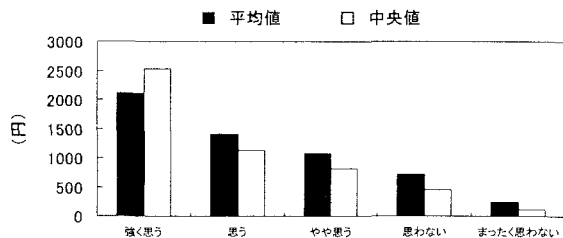


図-3 人工磯に関する関心度と支払い意思額の関係

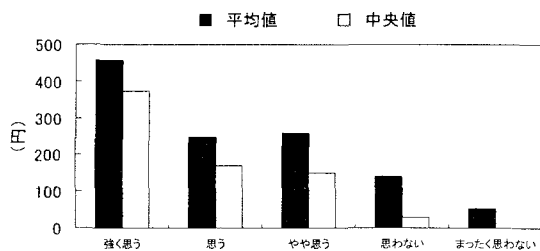


図-4 人工磯に対する関心度と利用料の関係

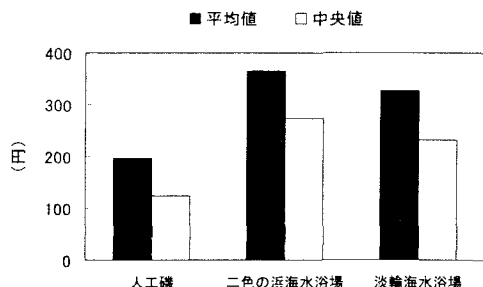


図-5 人工磯と海水浴場の利用料の比較